



# 日本への定着 決め手となるのは何か？

令和5年度

多文化Opinion Exchange

地域コミュニティとの交流から得たもの ～日本に住み続けたい理由～



# 本日の話の流れ

はじめに

---

「重要な他者」としての日本人  
—これまでの聞き取りから—

---

東日本大震災の時に見たもの  
事例として

---

まとめ

---

# はじめに

- 日本に暮らす「外国ルーツ」の人たちは、私たちの社会になくてはならない存在となっています。
- 現在、全国で働く技能実習生は、地方の過疎地域や人手不足の地域で主に働いているのは周知のとおりです（東京都にはほとんど技能実習生は在留していません）
- 都心の飲食店では、多くの店に外国ルーツのスタッフがいるはずです。
- 東日本大震災以降は、被災地にすぐに乗り込んで食事を提供する人たちも、多数報道されています。
- 例えば、東京新聞オンライン「トルコ地震で助けてもらった恩返しを」川口のクルド人が被災地で炊き出し ケバブなど5000食

# はじめに

- 外国ルーツの人たちは、すでに日本社会に根差し、地域の一員として暮らしています。
- ではその彼らが、長く日本にとどまり、できるだけ日本で暮らそうと思ってくれる要因とはどのようなところにあるのでしょうか？
- 話者の調査経験の中からお話をしたいと思います。





# 「重要な他者」としての日本人

—これまでの聞き取りから—

# 「重要な他者」としての日本—これまでの聞き取りから—

- これまで30人程度の元インドシナ難民の人に聞き取りを実施
- 大体の人は、日本語でインタビューに答えることができる、あるいは日本人のインタビュアーに、インタビューを受けてもよいと考えている人 = 日本での生活が安定しています。
- 複数人から、これまでの人生の中で「**キー**」になる**日本人**に出会っている。
- 例えば、聞き取り時点で40代の人が、「小学校の時の先生が、家族旅行の経験のない自分といたこのために、授業以外で動物園に連れて行ってくれた」とか。あるいは「職場のあの人には大変お世話になった」という言葉を何人かから聞きました。

# 「重要な他者」としての日本—これまでの聞き取りから—

- 荻野（2013）は、ベトナム難民を支えてきた民間の団体の人達のことを「重要な他者」と呼んでいます。吉田（2013）は、この荻野の書評で、「公的な支援体制の整備が不十分な日本においては、「ベトナム難民」が生活を安定させていく上で、身近な個人による支援が重要性を増すと想定し、こうした支援を提供する隣近所の人や職場の上司・同僚などを「重要な他者」と定義した。」としています。
- つまり、実際、日本人の中で、彼らにとって必要な精神的なサポートをした人に巡り合えたかどうか、定着に重要な一要因であるといえます



# 東日本大震災の後の帰国ラッシュの時

## 事例として



# 東日本大震災の後の帰国ラッシュの時－事例として－

- 東日本大震災時、外国人集住地区での生活相談業務を担当。
- その後、数か月は定住者の帰国ラッシュを経験。
- その中で、「誰が帰らなかったか」を考えました。
- ①様々な情報の中で、日本国内の情報にアクセスでき、そのうえでそれを確認できる日本人の知り合いがいた人。
- ②家族に日本人で、積極的に助けようとした人がいたこと。
- → 親身に接する日本人との関係性を構築できていた人／日本の情報を手にして、自分の判断を下せた人の中に「帰らない」選択をした人がいたのでは？
- これは、平常時でも同じなのでは？

# まとめ

- 日々暮らす外国ルーツの人が、「日本から帰らないでよい」と積極的に思える理由として考えられるものの1つに、どのような日本人とつながれるか？ということがあるのではないか？
- 日本社会の側としては、どれだけ彼らに「日本にいてもらえる」ような「重要な他者」になれるか、あるいは社会として「重要な他者」をどれだけ増やせるか、が重要なのでは？



The background features a light gray base with several abstract shapes: a large reddish-brown shape on the left, a large olive-green shape on the right, and a white outline of a leaf-like shape on the right. In the top left, there is a faint illustration of a leafy branch.

ご清聴ありがとうございました